頭ならびに腹

横光 利一

真昼である。特別急行列車は満員のまま全速力で駆けていた。沿線の小駅は石のように黙殺された。

とにかく、こういう現象の中で、その詰み込まれた列車の乗客中に一人の横着そうな子僧が交じっていた。彼はいかにも一人前の顔をして一席を占めると、手拭いで鉢巻をし始めた。それから、窓枠を両手でたたきながら大声で歌いだした。

「うちの嬶ア
福じゃア
ヨイヨイ、
福は福じゃが、
お多福じゃ
ヨイヨイ。」

人々は笑いだした。しかし、彼の歌う様子には周囲の人々の顔色には少しも頓着せぬ熱心さが大胆不敵にこもっていた。

「寒い寒いと
言うたとて寒い。
何が寒かろ。
やれ寒い。
ヨイヨイ。」

彼は頭を振りだした。声はだんだんと大きくなった。彼のその意気ごみから察すると、恐らく目的地まで到着するその間に、自分の知っている限りの歌を歌いつくそうとしているかのようであった。歌は次々にと彼の口から休みなく変えられていった。やがて、周囲の人々は今は早やその傍若無人な子僧の歌を誰も相手にしなくなってきた。そうして、車内は再びどこも退屈と眠気のために疲れていった。

そのとき、突然列車は停車した。しばらく車内の人々は黙っていた。と、にわかに彼らは騒ぎたった。

「どうした！」
「なんだ！」
「どこだ！」
「衝突か！」

人々の手から新聞紙が滑り落ちた。無数の頭が位置を乱してどよめきだした。

「どこだ！」
「なんだ！」
「どこだ！」

動かぬ列車の横腹には、野の中に名も知れぬ寒駅がぼんやりと横たわっていた。もちろん、そ

6 【嬶】妻。

7 【今は早や】今ではもう。すでに。

20 【寒駅】人けのない停車場。

こは止まるべからざる所である。しばらくすると一人の車掌が各車の口に現れた。
「皆さん、この列車はもうここより進みません。」
人々は息を抜かれたように黙っていた。
「H、K間の線路に故障が起こりました。」
「車掌！」
「どうしたッ。」
「皆さん、この列車はもうここより進みません。」
「金を返せッ。」
「H、K間の線路に故障が起こりました。」
「通過はいつだ？」
「皆さん、この列車はもうここより進みません。」
車掌は人形のように各室を平然として通り抜けた。人々は車掌を送ってプラットホームへあふれ出た。彼らは駅員の姿と見ると、たちまちそれを巻き包んで押し寄せた。数個の集団が声をあげてあちらこちらに渦巻いた。しかし、駅員らの誰もが、彼らの続出する質問に一人として答えうるものがなかった。ただ彼らの答えはこうであった。
「電線さえ不通です。」
一切が不明であった。そこで、彼ら集団の最後の不平はいかに一切が不明であるとはいえ、故障線の回復するべき時間の予測さえ推断しえぬという道断さは不埒である、と迫りだした。けれども一切は不明であった。いかんともすることができなかった。したがって、一切の者は不運であった。そうして、この運命観が宙に迷った人々の頭の中を流れだすと、彼ら集団は初めて波のように崩れだした。喧騒は呟きとなった。苦笑となった。まもなく彼らは呆然となってしまった。しかし、彼らの賃金の返済されるのは決まっていた。畢竟彼らの一様に受ける損失は半日の空費であった。なお引き返す半日を合わせて一日の空費となった。そこで、この方針を失った集団の各自とるべき方法は、時間と金銭との目算のうえ自然三つに分かれねばならなかった。一つはその当地で宿泊するか、一つはその車内で開通を待つか、他は出発点へ引き返すべきかいずれであるか。やがて、荷物は各車の入り口から降ろされだした。人波はプラットから野の中へ広がりだした。動かぬ者は酒を飲んだ。菓子を食べた。女たちはただ人々の顔色をぼんやりと眺めていた。
ところがかの子僧の歌は、空虚になった列車の中からまたまた勢いよく聞こえだした。
「なんじゃ
この野郎
柳の毛虫
払い落とせば
またたかる、
チョイチョイ。」
彼はその眼前の椿事は物ともせず、あたかも窓から覗いた空の雲の塊に噛みつくように、口をぱくぱくやりながら。そのときである。崩れだした人波の中へ大きな一つの卓子が運ばれた。そこで三人の駅員は次のような報告をし始めた。
「皆さん。お急ぎのかたはここへ切符をお出しください。S駅まで引き返す列車が参ります。お急ぎのおかたはその列車でS駅からT線を迂回してください。」

1【止まるべからざる所】停車予定ではない所。
18【推断】「恐らくこうであろう」と判断を下すこと。
18【不埒】道理や決まりから外れていて、許せない。
2【賃金】ここでは、支払った代金のこと。
2【畢竟】いろいろあっても、結局は。
16【椿事】思いがけないできごと。珍事。

さて、切符を出す者は？　群衆は鳴りをひそめて互いに人々の顔をうかがいだした。なぜなら、故障線の列車はいつ動きだすかわからなかった。したがって迂回線の列車とどちらが早く目的地に到着するかわからなかった。

さて？

さて？

さて？

一人の乗客は切符を持って卓子の前へ動きだした。駅員はその男の切符に検印を済ますと更に群衆の顔を見た。が、卓子を巻き包んでそれを見守っている群衆の頭は動かなかった。

さて？

さて？

さて？

しばらくすると、また一人じくじくと動きだした。だが、群衆の頭は依然として動かなかった。そのとき、彼らの中に全身の感覚を張りつめさせて今までの様子を眺めていた肥大な一人の紳士が交じっていた。彼の腹は巨万の富と一世の自信とを抱蔵しているかのごとくすばらしく大きく前に突き出ていて、一条の金の鎖が腹の下から祭壇の幢幡のように光っていた。

彼はその不可思議な魅力をもった腹を揺り動かしながら群衆の前へ出た。そうして彼は切符を卓子の上へ差し出しながらにやにや無気味な薄笑いを漏らして言った。

「これや、こっちのほうが人気があるわい。」

すると、今まで静まっていた群衆の頭は、にわかに卓子をめがけて旋風のように揺らぎだした。卓子が傾いた。「押すな！　押すな！」無数の腕が曲がった林のように。ことごとくの頭は太った腹に巻き込まれて盛り上がった。

やがて、迂回線へ戻る列車の到着したのはそれからまもなくのことであった。群衆はその新しい列車の中へ殺到した。満載された人の頭が太った腹を包んで発車した。跡には、踏みにじられた果実の皮が。風は野の中から寒駅の柱をそよそよとかすめていた。

すると、空虚になって止まっている急行列車の窓からひょっこりと鉢巻頭が現れた。それは一人取り残されたかの子僧であった。彼はいつのまにか静まり返って閑々としているプラットを見ると、

「おッ。」と言った。

しかし、彼はすぐまた頭を振りだした。

「汽車は、

出るでん出るえ、

煙は、のん残るえ、

残る煙は

しゃん癪の種

癪の種。」

歌は瓢々として続いていった。振られる鉢巻の下では、白と黒との目玉が振り子のように。

それからしばらくしたときであった。一人の駅員が線路を飛び越えて最初の確実な報告をもたらした。

「皆さん、H、K間の土砂崩壊の故障線は開通いたしました。皆さん、H、K間の……」

しかし、乗客の頭はただ一つ鉢巻の頭であった。しかし、急行列車は烏合の乗り合い馬車のよ

14【抱蔵】内側に隠しもつこと。

15【幢幡】仏堂に飾る、長い旗のような仏具。

6【閑々】落ち着いてのんびりしている様子。

うに停車していることはできなかった。車掌の笛は鳴り響いた。列車は目的地へ向かって空虚のまま全速力で駆けだした。

子僧は？　意気揚々と窓枠をたたきながら。一人白と黒との目玉を振り子のように振りながら。

「ア――

梅よ、

桜よ、

牡丹よ、

桃よ、

そうは

一人で

持ちきれぬ

ヨイヨイ。」

〈出典『定本　横光利一全集　第一巻』（河出書房新社、一九八一年）〉

【著者】横光 利一（よこみつ りいち）

一八九八（明治三一）年―一九四七（昭和二二）年

小説家。福島県の生まれ。

【著書】『日輪』『春は馬車に乗って』『機械』など